

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング617号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (3212) 4007・1480
Fax (3212) 1447
編集責任者 岡 沢 憲 夫
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1991年1月25日発行
第23巻第1号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.23 No.1

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

年 頭 の 辞

Message for the New Year

理事長 西村光夫

Chairman of the Board of Directors, Prof. Teruo Nishimura

明けまして、皆様にもよい年をお迎へなされたことと御慶び申し上げます。この誌上で新年の御挨拶を申し上げることも、いつのまにか二十回を越えることとなりました。この永い間特に誇るほどの業績もあげ得ませんでした。とにもかくにも二十年以上にもわたって、この仕事を積み重ねて参れたことはまことに御同慶に堪えぬところがあります。これ一重に各方面にわたるみなさまの深い御理解と御後援によるものと、心より御礼申し上げます。この研究所の仕事は次にも申し上げますが、これからますます意義あるものになると考へられますので、今後とも一層の御支援を賜りますよう衷心より御願ひ申し上げます。

思いますと一昨年秋から昨年、さらに本年にかけて、世界は激動に激動を続けてきております。そのうち、ソ連邦、東欧、中東の近状と将来、そしてその動きが全世界にどのような影響を及ぼすかの問題は、これからのわれわれの頭を久しきにわたって悩ますことでありましょう。

そのような情勢を前にして、スウェーデンの在り方は、いろいろな意味において、脚光を浴びることになるのではないかと思います。いま新聞は専らアメリカその他の大国の当面の動きと中東の動きにのみに目を奪われているようであります。しかし現在の混乱に若干の落着きがみられるようになり、そのときにはそれらの国々の人々は、必ずやそれぞれにどんな形態の国を作ろうかと考え、かつ論議するであります。

この点で、一番早く名のりを揚げたのは、ハン

ガリーの首相だったと思います。日く「これからの国造りは、スウェーデン型を目標としたい」というのでした。スウェーデンが一つのモデルとして無視出来ない国であることを証明する一つの例であります。

しかし、ハンガリーだけでなく、どの国についても、国柄などというものは、しんこ細工のように、モデル通りにできるものではありません。それぞれの国は、もともと住民のもつ伝統、宗教、民族性、教育水準、時勢、流行思想などの数多くの要素から構成されているにも拘らず、スウェーデンが一つのモデルとして挙げられているのは面白いことであります。

この辺のところを頭に入れながら考へると、スウェーデンを研究することの価値は一層深まるように思います。それにしても日本を一層良き国柄のものにしたいという念願からも、本年は当研究所の活動を一層活発にしたいと思ひますので倍回の御支援をお願いいたします。

目 次

年頭の辞	西村光夫	1
Season's Greetings		
.....カローラ・タム報道官		2
菓の伝統と正月	藤井ユリ子	3
スウェーデンにおける出生率上昇現象について		
.....三瓶恵子		4
平成2年研究所活動メモ		8

迎 春

年頭に当り、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

会 長 松 前 重 義

Season's Greetings

Mrs. Carola Tham, Press—and Cultural Attaché
Royal Swedish Embassy

I take the pleasure in greeting the members of the Japanese Institute for Social Studies on Sweden and wishing you all a prosperous New Year. During many years JISSS has pursued its various activities, centering on publishing, language classes and academic exchange.

The language courses and the yearly study tour to Sweden organized by JISSS is an important undertaking to expand the good relations existing between our two countries.

The excellent relations between Sweden and Japan have been strengthened during this past year. The visit of His Majesty King Carl XVI Gustaf in March in connection with the 10th Asahikawa ski-race, the technical and scientific symposiums in Hokkaido and the Royal Industry and Technology Mission to Japan under the patronage of H. M. the King, as well as the visit to Japan by Their Majesties The King and Queen for the Ceremony of the Enthronement of His Majesty the Emperor of Japan, have been culminations of these relations. Sweden and Japan are both at the forefront of research in areas of importance for tomorrow's world. Technical and scientific work is thus an important element of Swedish-Japanese cooperation. Important event in this area is the plan to establish an Institute of Japanese Studies at the highly esteemed University, Stockholm School of Economics.

Let me finally—on behalf of the Swedish Embassy—extend our best wishes to all members of JISSS and wish you all success for the coming year 1991.

藁の伝統と正月

Halmtradition och torsmånad

スウェーデン大使館広報部 藤井 ユリ子
Mrs. Yuriko Fujii

スウェーデン語の古語では1月を北欧神話の霜の神 (TORRE) の名にちなんで、霜の神の月 (torsmånad) と呼んでいた。霜月といえば日本では11月をさすが、このスウェーデンの「霜」は1月の北欧特有の厳しい寒さがもたらす現象である。すなわち、大気中の水蒸気が少ないため白い霜は生じないかわり、植物組織を凍結破壊させ、黒く枯死させるのである。スウェーデン語でbarfrost、英語ではブラック・フロストと呼ばれる。

この古語で表現されるように、スウェーデンの正月は、寒さが一段ときびしくなる時である。キリスト教国なので、大晦日の晩に花火を上げるくらいで格別の行事らしいものはなく、前年からのユール (クリスマス) が続いているだけである。ただ、かつては日本と同様に農耕社会であった名残を示すものがそこかしこに散見できて興味深い。

例えば、日本で正月のしめ飾りに藁が欠かせないように、スウェーデンでも麦藁 (ムギワラ) が重要な意味を占めてきた。今でも残るもので目を引くのは、黄金色のカラスムギの束と麦藁細工の雄山羊であろう。

年の暮れには、カラスムギの穂の付いた藁束が各戸の庭におかれ、雀や野鳥がかまびすしく群がり鳴く姿がよく見られる。ユールジェルペンと呼ばれるこの束はかつての農耕社会の豊穡の呪術の名残である。厳しい冬のこの時期に、小鳥たちに餌となる穀物を豊富に提供することによって、翌年の収穫にかれらが害を与えないように祈ったのである。

もうひとつは、ツリーの横に飾られる大きな麦藁細工の雄山羊、ユールボックである。サンタのソリを雄山羊が曳いているカードも見ることもある。なぜトナカイではなく雄山羊なのだろう。そういえば北欧神話の雷神 (TOR) の乗物を曳いていたのも二匹の雄山羊であったから、その影響でもあろうか。

そもそも19世紀の終りに、女流画家のイエニー・ニーストレムが、日本の座敷童やコロボックルによく似た北欧民話のトムテをサンタに仕立てあげるまでは、スウェーデンのサンタはユールボックがその役割を果たしていたのである。今もストックホルムの野外博物館スカンセンのユールの市に行けば、昔のままの悪戯ものの雄山羊に会える。

ツリーの飾りにも、星や冠など、伝統的な藁細工品が多く使われているが、18世紀後半にスモランド地方で描かれたユールをモチーフにした絵には、家の床に厚く藁を敷き詰めた光景が描かれている。この時代はまだツリーなどなく、藁自体がユールのシンボルとなっていた。

当時、屋内に持ちこむ藁は入念に選ばれ、寒い床を覆う断熱材やこの時節の子供達の遊びの材料にもなっていた。またユールの期間中家の中に入れられ、ユールの神聖な光に照らされた藁には、特別の力が内在するようになると信じられ、正月が過ぎてからもこれを保存して、事あるごとに色々なまじないに使われていたのだ。

スカンセンの古い農場を回ってみると、2~3m程のモミの若木の、先端の葉だけ残して下枝を払い落したものを、門口に2本、まるで門松のように立てているのが見られる。これはツリーよりも古い習慣だそうだ。

別の農場の建物の中では昔のユールのテーブルを再現して見せている。中でも印象的なのは、色々なパンをピラミッド状に積み上げたスウェーデン式鏡餅である。これは家族全員の席にめいめいの分が積まれている。昔は一番立派な物を残しておき、春先に種子撒きをする時、豊作の呪術に使用したという。このテーブルの下には藁で作った十字架がおかれ、床には古式にのっとり、黄金色の藁が敷き詰められている。古いスウェーデンの清々しい正月風景である。

GOTT NYTT ÅR 1991 !

スウェーデンにおける出生率上昇現象について

会 員 三 瓶 恵 子
Ms. Keiko Kjellsson-Sampeï

スウェーデンにおいては、ここ数年出生率が上昇している。1989年の統計ではヨーロッパで一、二の数字を誇っている。一方日本では空前の低出生率に当局が不安感を持ち、真剣に対策を練っているところで、その関係からも特にスウェーデンの状況が注目されている。

しかし現在のベビー・ブームは本当にスウェーデンにおける人口増加のカーブを急上昇させるだけの力を持った「本物」であるのだろうか。この小文は、その問いに答えるために、現在のスウェーデンのベビー・ブームの背景にあるものを明らかにしようとする一つの試みである。

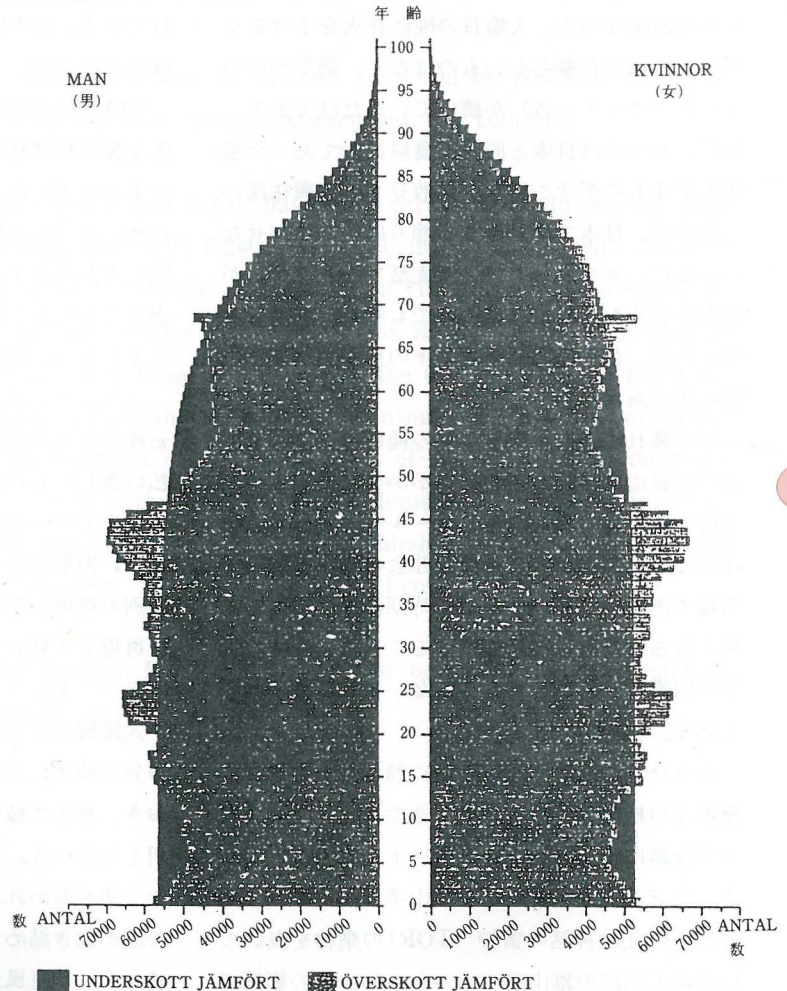
少し古いレポートであるが、中央統計局が1987年に出した、1945年から1985年までのコホート（ある一定年齢層を一つのグループとしてくるもの）別の人口学的生産性を比較、分析したものがある（SCB Demografiska rapporter 1987 : 3 Kohort-fruktsamhet 1945-1985）。それによれば、1960年代後半から約20年続いた「低出生率時代」の原因は、若いときに子供を生む傾向が年々減少してきた、つまり女性により年をとってから子供を生むようになってきたからだと分析されている。とくに20代の女性の出生率の低下が顕著で、30代の女性以下になっている。このことは「20代の女性が30代になるまで出産時期を延期している」と解釈されている。1985年の時点で大体出産を終えた女性たちは、1940年代半ばの生まれである。彼女たちのコホートとしての出生率（TFR）は、1.9であ

った。つまりこの女性たちは平均して1.9人の子供をもったのである。1950年代、1960年代生まれの女性たちはまだ「出産適齢期」にあるのでTFRの数字は出ていないが、このレポートでは1.8になるものと予想されている。すなわち長期的な分析では、スウェーデンの出生率はさらに低下することが予想されているのである。

しかしこのレポートが書かれた時点から3、4

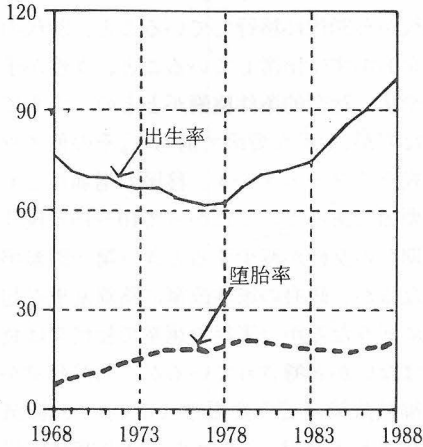
〈第1図〉 1988年末現在の人口ピラミッド

Folkmängd i tusental i hela riket efter kön och ålder 1988-12-31 jämfört med köns- och åldersfördelningen i 1988 års livslängdstabell
Population per thousand by sex and age, Dec. 31, 1988 compared with the distribution of sex and age in the life tables 1988



出所：SCB 1989 : Befolkningsförändringar 1988 Del 3

〈第2図〉
年齢別出生率および墮胎率
30—34才



年たった現在では、以前のこの傾向に「ちょっと待った」がかかっている。

1988年のスウェーデンの全女性のTFRは2.0であった。1989年には2.0を越す数字になっている（89年統計は現時点ではまだ正式発表になっていない）。

この変化はどう説明されるのか？まず第一に、第一図からわかるように、男女とも20代から40代がそれ以前のコーホートに比べて数が多いということがあげられよう。この年代層はおおむね子供を生む年代層に一致する。女性だけに限ってみると最も多いのは40～45歳であるが、この年齢層はおおむねもう出産を終えているので、注目すべきはそれ以外の、すなわち20～40歳の層である。このうち25～40歳の年齢層はその前後に比べれば少ないが、それでも平均余命から算出した数字よりは多くなっている。

上記のレポートでも触れられていたように、30代以降の出産率が急上昇している。この傾向は1988年の統計でも顕著で図2はそれを示している。1988年の数字では第一子出産時の母親の平均年齢は26.7歳であった。20代の出産が減少していることと比べ合わせてみると、この数字は30代の出産率が多いことを裏づけるものである。

ではなぜスウェーデンの女性は出産を先に延ばすようになったのか？

その原因としては先進国に共通する、女性の高学歴化ということに加えて、スウェーデン特有の社会保険制度の仕組みということが考えられよう。若いときの低い収入のまま育児休暇に入れば、「親

保険」（社会保険から支給される育児休暇手当）の額も低いままである。また職場に戻る際にもちゃんとある程度の「地位」を確立しておいたほうが良いし、再就職する際にも、小さい子連れで余りキャリアがないのはいいところは望めない。

また2年前に変更になった親保険支給の規則の影響も大きい。それは「第一子出産から2年半以内に第二子を出産すれば、第一子のときと同じ額の親保険が支給される」というものである。以前の規則では、こういう場合は最低保証額しか受けられない仕組みになっていて、親にとっては大変不利なものだった。

地域の母親ケア・センターの職員や、医師にインタビューしてみると、「この変革以降、間をおかず子供を生む女性が大変多くなっていると感じている」そうだ。この傾向には、30代女性にとって子供が生めなくなるタイム・リミットが直ぐ後に控えていることも影響しているかもしれない。

また社会的な条件整備もやはり無視できない要因であろう。育児休暇を取ることに、夫も育児に参加すること、足りないながらも保育所が増設されていること、単身の親でも仕事を続けながら子育てができるように社会が手をさしのべる仕組みが整ってきていることなど。働く女性が「仕事か子供か」の二者択一を迫られて悩むことは、スウェーデンだってあるだろうが、日本ほどではないだろう。

また北欧に多い「新しい」結婚の形態も影響しているかもしれない。スウェーデンはデンマークに次いで同棲の多い国である。一生結婚をしない人もいるが、多くのスウェーデン人は初めに同棲でパートナーとの相性を確かめて、何年かたってから（多くの場合子供が生まれてから）結婚する。20代後半まで学生生活をする場合も多いので、結婚、出産は30代にずれ込んでくることになる。

一方、この「スウェーデンにおける、同棲・結婚というあまりかたくなくない絆」は、慰謝料の習慣がないことや財産争いが比較的スムーズに解決することなど、離婚訴訟が複雑ではないことと相俟って、男女が「くっついたり、離れたたり」する機会が大変多いことにも繋がる。多く見られるのは若いとき（20代）に家庭造りに失敗して、子づれで離婚し、年をとってから（30代後半）に新しい相手と巡り合って、新しい家庭を作り、子をもうけるというものである。

スウェーデンの出生率増加の一因として、移民

の増加の要因も無視できない。現在スウェーデンの人口の約一割が移民だといわれているが、スウェーデンでは比較的容易にスウェーデン国籍が取れること、ギリシャなどの一部のヨーロッパの国々と、大人であっても二重国籍をもてるような条件をむすんでいること、多くの国と子供についての二重国籍を認める条約があることなどによって、あまり正確な実態は掴めない。第一表は1979年から1988年までの国籍別の誕生にかんする表である。かなりの移民がスウェーデン滞在の条件を有利にするためにスウェーデン国籍に変わっていること（第二表参照）を考慮に入れなければならないので、この表から計算できる外国国籍の赤ん坊の誕生の割合（1988年、6%強）は低すぎる感じがする。私のような素人には良く読み取れないが、第三表はこの観点からスウェーデンに住む移民の国別（スウェーデン国籍も含む）の興味深い傾向を示している（ユーゴスラビアやトルコ人は若いときに出産する率が比較的高いこと、またトルコ人は40代になっても出産する傾向がみられることなど）。

以上スウェーデンのベビー・ブームの原因について考察してきたが、要約すれば、「出産適齢期」の女性が多くなってきていること、「出産適齢期」が20代から30代に移行していること、30代の女性が間をおかずに出産していること、女性が子供を生みやすい社会的条件整備がととのってきていることなどが、おもな要因であろう。その他スウェーデン式ライフ・スタイル、移民の増加なども副次的な要因であろう。したがって10～15年後「出産適齢期」の女性が減少するとき（第一図参照）にどうなるか、政府の家族政策に路線変更が起きたときにどうなるか（来年の選挙で社民党は負けるのではないかと噂されているが、右派政党が勝ったら福祉政策はどう変更されるのか）、経済不況が予想される今日、「女はやっぱり家庭に帰れ」などという風潮が出てきたらどうなるのか等々、先行きは占えない。日本のお役所が出生率を上げるべくスウェーデンから何かを学ぼうとするならば、彼等が出来ることは、女性が子供をもっても働き続けて行けるような社会的条件整備をすることしか無いのではなからうか。

〈第1表〉 国籍別・年度別出産数（於スウェーデン国内）

(国籍)	(1979)	(1982)	(1985)	(1988)
北欧	92,498	89,742	95,223	107,580
スウェーデン	88,203	86,394	92,489	104,853
デンマーク	431	288	252	302
フィンランド	3,403	2,720	2,067	1,926
アイスランド	88	95	71	86
ノルウェー	373	245	344	413
他のヨーロッパ諸国	1,904	1,189	1,130	1,171
アメリカ諸国	160	139	145	178
北アメリカ	66	38	44	89
南アメリカ	41	41	37	86
アジア	1,059	1,021	1,233	1,695
その他の諸国	527	578	651	1,281
(総計)	96,255	92,748	98,463	112,080

原表の出所：SCB 1989: Befolkningsförändringar 1988 Del 3

〈第2表〉 外国籍よりスウェーデン国籍への変更数 (1988)

以前の国籍	男	女	計
デンマーク	252	290	542
フィンランド	2,075	2,219	4,294
アイスランド	9	13	22
ノルウェー	225	287	512
ユーゴスラビア	698	499	1,197
ポーランド	890	1,370	2,260
ルーマニア	122	108	230
西独	107	102	209
ハンガリー	90	118	208
チリー	330	303	633
コロンビア	162	114	276
インド	147	234	381
イラク	314	147	461
イラン	434	140	574
トルコ	633	540	1,173
ベトナム	231	227	458
その他の国	2,359	2,177	4,536
(総計)	9,078	8,888	17,966

原表の出所：SCB 1989: Befolkningsförändringar 1988 Del 3

〈第3表〉 母親の出生国別、国籍別の年齢別出生率 (1988)

母親の出生国	母親の年齢と国籍	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49
スウェーデン		9.9	86.0	146.7	100.9	35.2	5.6	0.3
	スウェーデン国籍	9.8	86.2	146.8	100.9	35.1	5.6	0.3
	スウェーデン以外の国籍	12.7	70.2	128.0	95.1	53.2	13.8	
デンマーク		25.5	140.8	151.1	91.6	39.9	7.4	
	スウェーデン国籍	15.1	136.7	173.4	80.3	30.9	8.2	
	デンマーク国籍	29.2	138.2	133.9	97.8	48.8	6.5	
フィンランド		36.3	114.8	132.8	84.1	34.1	7.6	
	スウェーデン国籍	35.6	120.3	148.7	81.4	28.9	7.2	
	フィンランド国籍	36.7	109.9	121.4	85.5	38.3	8.0	
ノルウェー		44.1	142.3	143.2	81.0	36.4	9.4	
	スウェーデン国籍	58.0	148.4	133.3	86.5	36.2	10.0	
	ノルウェー国籍	40.1	141.1	143.8	77.0	35.7	9.0	
ユーゴスラビア		65.2	160.3	126.9	53.9	17.4	4.1	
	スウェーデン国籍	9.5	102.6	105.9	70.1	20.9	4.3	
	ユーゴスラビア国籍	78.3	177.6	132.7	49.2	16.0	3.5	
ポーランド		31.6	139.2	132.3	75.5	40.2	13.5	
	スウェーデン国籍	19.4	86.0	140.4	78.1	38.4	12.3	
	ポーランド国籍	41.1	165.1	126.3	73.3	41.2	15.6	
トルコ		65.2	228.9	186.6	131.1	77.7	23.7	10.8
	スウェーデン国籍	19.4	185.3	217.8	131.8	50.5	21.1	14.1
	トルコ国籍	85.3	232.8	177.6	126.7	85.8	24.7	9.4

原表の出所：図1と同じ

- 2.22 越智啓介元駐スウェーデン大使の告別式
に出席
- 3.22 カール16世、王立理工学アカデミー等科
学視察団レセプションに西村理事長出席
- 4.9 平成元年度募集の派遣研究員の面接選考
実施、下記2名の合格決定、上平正道 名
古屋大学工学部助手
小島哲也 信州大学教育学部助教授
- 4.9 スウェーデン語講習会(通算72回目)開
講
- 4.25 常務理事会開催(総会準備)
- 5.31 研究所通常総会開催(事業計画および予
算)
- 6.11 日瑞基金通常総会開催(事業計画および
予算)
- 6.25 FAX設置(03-3212-1447)
- 7.2 岡沢憲芙常務理事が日経連社会保証特別
委員会主催の講演会にて講話(スウェーデ
ンについての政治理念、デモクラシー実験
室等につき)
- 8.7 麴町社会保険事務所に算定基礎届を提出
- 8.20 平田富太郎前所長夫人ご逝去
- 9.1 岡沢憲芙常務理事がNHK教育放送によ
るウィークエンドセミナー(テーマ、福祉
国家への選択)5夜放送開始
- 9.18 スウェーデン語講習会(通算73回目)開
講
- 10.30 オンブズマン研究会開催(講師、川野秀
之玉川大学教授、テーマ、スウェーデンの
政治制度の日本に与えた影響-川崎市民オ
ンブズマン)
- 11.26 日本平和学会、横浜市共催のヨーク国際
シンポジウムのヤン・ベルイ未来・平和研
究所所長の講演会に出席
- 12.12 当研究所事務室が丸ビル内の781号室よ
り617号室に移転

事務局より

賀 正

本年も本誌のご愛読とご寄稿などご後援を
お願い申し上げます

追 伸

前号でもご案内申し上げましたが、当事務局が去る12月12日に同じ丸ビル内六階の617号室に移転い
たしました。

電 話 (03) 3212-1480・4007

FAX (03) 3212-1447